

【事例1：みんなのお茶の間くるくる（北海道・札幌市）】

■活動のきっかけ・経緯

- ・ 主宰者の土橋紘子さんは、小学校教員として勤める傍ら、週末は地域とのつながりを求めて地域の青少年育成委員として活動していた。
- ・ 退職後も、人と人が緩やかにつながるまちにしたいという想いを、町会活動などに関わる中で模索していた。地域の商店街で開催された「まちづくりを考える会」で、新潟のまちづくりコーディネータ清水義晴氏から「地域の茶の間」の話を聞く。
- ・ 当時、札幌ではサロン活動があまり行われていなかったが、新潟市の河田佳子さんの取り組み「うちの実家」に惹かれ、現地の見学と勉強を重ね、2003年12月に仲間と「くるくる」を立ち上げる。
- ・ ボランティア研修センター、社会福祉協議会などで「くるくる」の紹介を積極的に行う他に、学会・シンポジウムや「うちの実家」への定期的な訪問を通じた勉強、町会活性化プロジェクト、商店街のイベントなどに主体的に関わり、まちづくりの担い手として活動している（知り合う事を目的に、茶の間メンバーと商店街に食事に出かけたり、よその地域の茶の間の訪問も行っている）。

■活動内容

自宅のガレージを和風の空間に改造して「くるくる」を開設。開設日は、毎週火曜日の10時～15時で、お茶とお菓子代として夏季100円、冬季は150円の参加費をもらっている。



＜ひだまりでのおしゃべりと手芸活動＞



＜これまでの手作り作品＞

- ・ 好きなときに、好きな事をして過ごすことをモットーに敢えて会員制にはしていないため、10名程度のリピーター（主に女性）を中心に、口コミで聞きつけた人が立ち寄ることもある。
- ・ 90代の利用者が来なくなって連絡をしたりと、「茶の間でゆるやかにつながる」ことが見守りにもつながっている。
- ・ 基本は、好きな事をして時間を過ごすことだが、手芸の得意な利用者同士がアイデアを出し合って手作り品を作成し、保育園や敬老の日のイベントでのプレゼントや、商店街のバザーなどでの出店をしている（喜んでもらえる事が嬉しいので、常に創意工夫している）。

- ・茶の間の開催以外の時間帯では、パッチワークや南京玉すだれなどの教室の定期開催や、町会の打合せ、夏休みの自由研究のお手伝いイベントなどで利用されている（高齢者だけではなく、子育て世代などにも門戸を開いている）。
- ・友人を中心に「くるくる」を見学した人々により、ここをモデルにした多様な拠点での茶の間「みずほ（地域の会館）」、「なでしこの会（自宅にある集会室）」「きまま かふえ（生活クラブ生協の事務室）」が開設している。

■ポイント・工夫している点

- ・新潟の「うちの実家」を参考にして開設された地域の茶の間だが、さらにここがモデルとなって、周辺に複数の拠点が広がっている（口コミと見学による自然増殖）。
- ・自宅を地域に開放し、いつでもだれでも自由に参加できる「ゆるいつながり」を大切にしている。
- ・2005年からは、「くるくる」に出入りしていた精神障がい者支援NPOの青年の発案で、平日の昼間は集まりにくい現役世代をターゲットに、「夜のお茶の間」を開催している（毎月第三金曜日の18時半～21時、参加費500円、白石まちづくりハウスと交互での開催している）。

■課題と今後の展開

土橋さんは、今後の課題と展望について以下のように語る。

- ・新潟市の地域の茶の間の数と較べると、札幌市はまだまだ少ない¹。
- ・「くるくる」という場も大事だが、町会を主体とした「ふれあい広場本郷」との連携、皆で食事ができる場所など、多様な場があった方がよい。
- ・東日本大震災による被災者の受け入れを表明しているが、まだ実現はしていない。

¹ 札幌市での地域サロン活動の概況：子育て、障がい者、高齢者などを対象に多様な拠点でのサロンが開設されている。平成22年度の札幌市地域サロン開催実態調査によるとその数は781箇所。

【事例2：シニアSOHO三鷹（東京都・三鷹市）】

■活動のきっかけ・経緯

- ・1999年1月、堀池喜一郎氏（前代表理事）らが三鷹在住の大学同窓会のホームページを作ったもののほとんどアクセスがなかった。原因は、同窓生がインターネットになじみが薄く、それなら皆でメールのやり取りができるサロンを作ろうということで活動が始まった。三鷹市の理解も得て、地域で自分の楽しい・得意技活動を始めようという呼びかけで70人のシニアが集まり、「シニアSOHO普及サロン・三鷹」を立ち上げた。パソコン講座からスタートしたが、テキストは当初は自前で作成した。
- ・2000年、有料のパソコン教室を本格稼働させる。政府のe-JAPAN2000で、延べ3500人に有料でパソコン研修を行なった（杉並区・世田谷区にも出張講座を行なっている）。2000年11月にNPO法人として認可される。
- ・会の目的は「シニアの地域ビジネス参加のプラットフォーム」である。従来の「アクティブシニア」から、多少くたびれていても地域で元気に活動できる「スマートシニア」をめざしている。

＜シニアSOHO三鷹の会員数・売上高の推移＞

年度	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010
会員数 (人)	70	120	180	220	250	285	250	200	180	180	150	160
売上 (百万円)	5	12	47	55	65	57	47	78	86	96	97	105

（参考）シニアSOHO三鷹の受注事業内訳（2010年度）

市民PC講座（注）	1百万円	わくわくサポート	16百万円
学校SNS管理	5百万円	コミュニティビジネスサロン	5百万円
高齢者社会マッチング	6百万円	みたかスクールエンジェルズ	30百万円
市役所内PCヘルプデスク	3百万円	小中学校校庭緑化事業	7百万円
三鷹ユビキタス事業SNS	4百万円	その他	14百万円

（注）市民PC講座の受講料（年間約700万円）は講師陣に直接支払われるため、上記には含まれず。

■活動内容

- ・事業の根幹は、①IT習得、②ベンチャーをめざす交流・自己発見、③スキル情報発信・マッチングの3本である。

●シニアパソコン教室

- ・「コミュニティビジネス」の発想で、パソコンを使って地域活動をしてもらうことを目指している（単なる「趣味のパソコン教室」ではない）。
- ・2011年からは携帯電話やiPadの講座をスタートさせた。iPadの講師は82歳と85歳のシニアである。近いうちにスマートフォンの講座も開講したいとしている。

- ・主なコース：基礎コースから応用コースまで年間 1000 コマがあり、7 チームで運営している。チームごとの独立採算となっているのが特色である。「ゆうゆうサロン」はそのうちのひとつのグループであり、開催講座数も10を超えるなど、活動度はトップクラスである。
- ・最近立ち上がった特色のある教室として、「PC道場」がある。特定の機器やアプリケーションの習得に限定しないコースで、生徒が思い思いの課題をもって教室に集まってくる。同窓会の名簿作りをしたいというシニアから、illustrator を使いたい若者まで多世代にわたり、要求内容も多様である。講師陣にもかなりの経験とスキルが要求される。
- ・後述する「シニア情報生活アドバイザー」、**「シニアITアドバイザー」**の資格認定試験も行っている。合格者がそのままパソコン教室の講師となるケースも少なくない。



<シニア情報生活アドバイザー講座>



<iPad 講習会>

シニアSOHO三鷹におけるパソコン教室コース例

ビデオ編集講座	ホームページビルダー講座	パワーポイント講座	PC道場
ブログを作ろう！	デジカメ動画活用塾	iPad 体験講座	ゆっくり講座

●講師陣

- ・主任講師とサブ講師から構成される。主任講師は40人。男女比は半々。IT専門家でない「普通の人」も多い。年齢は50代～80代（平均65歳）。
- ・主任講師は、ニューメディア開発協会認定の「シニア情報生活アドバイザー」²か、富士通ラーニングメディアが認定する「シニアITアドバイザー＝略称SITA」³資格を取得していることが条件。前者はシニアとのコミュニケーションスキル、後者はパソコン利用の基本知識に力点がおかれている。

●受講生

- ・シニア中心だが、最近では、シニアだからといってメディアリテラシーが遅れているというようなことは少なくなった。

² 「シニア情報生活アドバイザー」 <http://www.nmda.or.jp/mellow/adviser/>

³ 「シニアITアドバイザー」 <http://jp.fujitsu.com/group/flm/services/opencollege/course/sita/>

■ポイント・工夫している点

前代表理事の堀池喜一郎氏は、シニアSOHO三鷹のポイントとして以下を指摘する。

- ① 「シニアは地域の埋蔵金」と考えている。眠っているシニアの能力・役割を発揮してもらいたい。
- ② 3つの「がい」＝「生きがい、やりがい、ナイスガイ」がポイントである。「生きがい」（自分が楽しむ）、「やりがい」（町で喜ばれる）、「ナイスガイ」（カッコいい、輝く）。
- ③ 事業を成功させるには「つながる」>「はじめる」>「継続する」の視点が不可欠。
「はじめる」のポイントは、「人がやらない自分の得意技を活かす」「人に喜ばれ、役に立つこと」「有償でやること」「(広義の)専門性を発揮すること」。自分らしさを発揮することが重要で、従来型の「専門性」は不要（やっているうちに専門性が出てくる）
- ④ 面白く継続させるには、「プロデューサー」、「プレイヤー」、「サポーター」の3種の人の組み合わせが重要。

- ・ 営業活動を当初は無償で行っていたが、その重要性が認識され、成功報酬として1割を支払うように変化していった。
- ・ 三鷹で早い時期から市民によるパソコン教室開催が可能であった地域的背景としては、①三鷹市内には大企業サラリーマンを退職し多様なスキルをもつ高齢者が多かったこと、②三鷹市の産業政策として大規模工場の移転を推進したあとSOHO政策を推進しようとしていたこと、③NTTのINSモデル実験⁴などでITへの親和性が高かったこと、などが指摘されている。

■課題と今後の展開

- ・ 立ち上げ当初の2000年はパソコン教室からスタートしたが、これから出てくるシニアはITリテラシーも高く、機器やアプリの操作性も向上していくので、これからは人にパソコン操作を教えてもらうような時代ではなくなるかもしれない。
- ・ 現に、シニアSOHO三鷹の事業に占めるIT関連事業の比率は低下傾向にある。今後はパソコンという「道具」の使い方を学ぶ時代から、地域にどのような貢献ができるかの真価が問われる。多彩なコミュニティビジネスモデルの展開がこれからのキーとなる。
- ・ 三鷹市の小・中学校でパソコン教室を開催したこともあったが、人材をまとめていく能力が学校側に認められ、その後の「スクールエンジェル事業」（学童見守り事業）につながっていった。

⁴ 1984年、当時の電電公社（NTTの前身）が三鷹市内に光ファイバーを敷設し、全国に先駆けて様々な電子社会サービス実験を行った。

【事例3：多摩平～団地再生（東京都・日野市）】

■事業内容

●大都市近郊の団地再生

- ・昭和35年に入居が開始された旧多摩平団地（当時の日本住宅公団が開発）の一部を立て替える「多摩平の森 ルネッサンス計画2 住棟ルネッサンス事業」（UR都市機構と民間事業者の共同事業）としてスタートした。
- ・住棟ルネッサンス事業の街区名称は「たまむすびテラス」である。
- ・全体は以下の3つのユニットから構成される。
 - ① 団地型シェアハウス「りえんと多摩平」（事業主体：東電不動産）：
若者を中心としたシェアハウス（2棟）
 - ② 菜園付き共同住宅「AURA243 多摩平の森」（事業主体：たなべ物産）：
ファミリー層を中心に、貸し菜園と専用庭を併用した共同住宅（1棟）
 - ③ サービス付き高齢者賃貸住宅・コミュニティハウス「ゆいま～る多摩平の森」（事業主体：
㈱コミュニティネット）：
「高齢者が最期まで自分らしく暮らせるコミュニティ」として、常勤スタッフや医療機関との協力、ショートステイ機能等を備えた住まい（2棟）

●「ゆいま～る多摩平の森」

- ・サービス付き高齢者賃貸住宅として、2011年10月に完成（全部で63戸）。
- ・JR豊田駅から徒歩10分圏と便利な立地で、市民病院や商業施設も近隣にある。
- ・入居者は、日野市をはじめとする東京都西部からの高齢者が多い。
- ・比率としては、単身女性が一番多い。
- ・有料ショートステイを併設しているのも大きな特徴である。
- ・また運営会社である㈱コミュニティネットからは、ハウス長をはじめ日勤スタッフ3名、宿直スタッフ2名が配置されており、入居者にとって支えとなっている。
- ・入居者は自室のキッチンで自炊調理ができるが、食堂を利用することも可能である。
- ・四季折々の行事や音楽イベントなどが随時、開催されている。これには、若者やファミリー世代も参加する。
- ・編み物が得意な高齢入居者がシェアハウスの若者に手芸指導をおこなうなど、世代間交流が図られている。

■入居者のプロフィールとコメント

<Oさん>60代、女性

- ・日野市の高層マンションに一人で暮らしていたが、体を壊したり、東日本大震災でオートロックドアの閉じ込めなど心配になった。
- ・日野市の広報を見て、友人と見学会に参加。人里離れたところはいやだが、ここは街中で病院も近く、周辺に緑も多いので、入居を決めた。

- ・上下階の物音が多少気になる程度で住み心地はいい。

<Tさん>80代、女性

- ・日野で母と同居していたが、母をあずけて、一時、多摩エリアの賃貸住宅に引っ越す。
- ・ひとりの生活は自由だが、緊急時の連絡先を書かねばならず、困っていた。
- ・有料老人ホームは高いし、老人ホームにも入りたくない。
- ・以前から、コミュニティハウスには関心があり、いろんな勉強会や見学会によくでかけた。
- ・こちらの会社のスタッフとも顔見知りで、ここにしてよかった。
- ・若い時の日野の思い出が懐かしいと同時に、様々な趣味活動（散歩の会、写真教室、視覚障害者のメディア変換ボランティアなど）を楽しんでいる。

<Yさん>70代、女性

- ・近隣にある戸建ての自宅に一人暮らししていた。息子夫妻からは同居をすすめられたが、日野を離れたくなかった（同居するとたぶんストレスもたまりそうだし）。
- ・有料老人ホームは素晴らしいが、値段が高すぎる。
- ・息子同伴で説明会に出席したが、自分の意思で入居を決断した。
- ・自分のことは自分で決めるから、決して後悔しない。
- ・南向きの部屋で、室内に朝日がすーっと差し込んだのを見て、ここを「終の住みか」とすることを決断した。
- ・現在、シェアハウスの若者に編み物を教えている。



<若者に編み物を教える>



<世代を越えて季節毎の行事>

■展望と課題

- ・2011年秋にオープンした新しいコミュニティであるが、大都市圏の老朽化・高齢化が進んだ団地再生の先駆的モデルとして、今後の展開が注目される。
- ・とりわけ、高齢者世帯と隣接する若者世代やファミリー世代との世代間交流がうまく機能すれば、多世代にわたる持続可能な先進コミュニティモデルとなりうる可能性を秘めている。
- ・今後5年～10年が経過してゆく段階で、入居者の高齢化（後期高齢者への移行）が進むと考えられるが、その方々の日常を支えていく医療・介護系サービスとの連携が重要な役割を果たすようになる。

【事例4：よろずや余乃助（群馬県・大田市）】

■活動のきっかけ・経緯

- ・桑原三郎氏が県立太田高校を卒業就職後に地元に戻った時に、色々な職についている同級生と奥様を含む約20人の「梅田クラブ」という懇親会を結成し定期的に集う中で強い絆が出来上がった。
- ・やがて地域社会の高齢化や町の衰退で起こる問題や生活する中で起こる困ったことを、何とかメンバーが保有する専門知識を活かして問題解決できないか、そしてみんなが良好な環境のもとで元気に安心して暮らしせる活力のあるまち作りに寄与したいと考えて、市内に専用の活動場所を設けて2002年12月にNPOとして「よろずや余之助」を設立した。
- ・その後それぞれの職業や専門的な経験を活かしたよろず相談事業を中心に運営しつつ喫茶事業や教育事業に拡充させて、今では全事業に携わる登録会員は60～70歳を中心に約100名に増えている。定常的な事業運営の収支は採算が取れており、順調に運営している。

■活動内容

- ・よろずや余之助の活動場所は太田市内の静かな場所にあり、一見すると普通の喫茶店で、駐車場もあり専用の建物で、利用者はNPOの活動拠点というより、楽しく集える憩いの場とされているようで、気軽に利用しやすい雰囲気を感じられる。



<よろずや余乃助の外観>



<代表の桑原三郎氏>

◆相談事業■

- ・よろず相談は「誰でも、何時でも、どんな事でも気軽に相談できる」ことをコンセプトに無料で行っており、相談員は機敏に対応出来る統制の取れた異業種専門家集団である登録会員100名の中から相談内容に合ったメンバー10数人が対応しており、どのような相談でも解決できる体制で実施している。相談日は、毎週火曜日と土曜日の14時～16時に予約制で行っている。
- ・相談件数は、年間約150件で、ゆっくり増加する傾向にある。仲介し請け負った仕事は、手数料として総額の5%を頂いている。



＜気楽に何でも相談できる＞



＜「よろず相談」の新聞広告＞

- ・相談は無料であるが解決のために工事が必要であったり、専門的な手続きが必要な時は、各部門の専門家が責任を持って対応する。
- ・その職業・保有資格は、医師、弁護士、税理士、歯科医師、不動産業者(宅地建物取引主任者)、建設業者(一級建築士)、中小企業経営診断士、エクステリアメーカー及び施工業者、学習塾経営者、行政書士、測量士、社会保険労務士、PCインストラクター、知的障害児童教育専門家、銀行員、飲食店経営者などで、相談の内容は、主に建物補修関係(家の内外共)、法律相談、税に関する相談、人間関係(親子・隣人等)相続に関する相談等が多い。
- ・自治体の支援や地方新聞にも掲載認知されつつあり「よろずや余之助」の看板は大きいという。

◆喫茶事業■

- ・喫茶事業には、喫茶・軽食の他に、物品販売やお手軽公民館がある。
- ・店内に入るとすぐ30人程座れる喫茶・軽食スペースがあり、憩いの場には美味しいコーヒーが最も大切とのこと。毎日必要なだけ自家焙煎する本格的なコーヒーを1杯250円で提供している。
- ・この場所を利用して、定期的に歌声喫茶やフォーク喫茶や映画喫茶などが開催されている。
- ・歌声喫茶は、月に一度第4土曜日に午後2時～3時半まで開催され、お茶・ケーキ付き500円の会費で50～80歳の方が30名ほど市内と隣接市から参加している。男性参加者が5～6人で楽器伴奏指導の男性3名を含め、男性高齢者参加率の高いことが特徴的である。



＜歌声喫茶＞



＜高齢の男性が伴奏＞

- ・歌声喫茶は、音楽の元先生の指揮でキーボードとギターとアコーディオンの伴奏により、歌集から選んだ歌をみんなで歌うもので、参加理由は昭和40年台に流行って楽しかった新宿の歌声喫茶を懐かしみ、また別日に開催されるフォーク喫茶に参加してからが多く、高齢になり自由な時間が取れるようになったので参加しており、余之助以外で開催される歌声喫茶にも積極的に参加している。
- ・男性の参加のきっかけは、もともと歌うことが好きという理由が多い他に、フォーク喫茶や映画喫茶に参加してから開放的で来やすいので参加するようになった。
- ・入り口付近に物販事業ブースがあり、趣味で作っていた商品やおやきや化粧品など他で入手しにくい健康や安全に気配りしたこだわりの商品で人気が高く、経営的にも貴重な収入源となっている。
- ・喫茶と隣接してお手軽公民館事業の部屋があり、10名程度までの集会所として打合せができる。ここは利用者の作品を展示するギャラリーにもなっているほかパソコンも用意されている。

◆教育事業

- ・教育事業としては、自治体や一般の施設では学習支援の難しい、知的障がい児の能力開発を手助けする学習塾「かんがるうクラブ」を専用の部屋を設けて開設している。
- ・相談員の中には知的障害児童教育の専門家がおり、適切な学習が実施できる体制を整えている。



＜かんがるうクラブ専用の部屋＞



＜学習に十分な広い部屋を用意＞

■ポイント・工夫している点

- ・相談解決にボランティアが必要なときは「太田NPO協議会」や「社会福祉協議会」の協力を仲介する他に、太田市役所、太田商工会議所、太田NPOセンター等の支援も取りつけている。
- ・相談員は、気分をリラックスさせて気楽に会話しながらできるようにすることが大切で心掛けている。
- ・こだわりの商品探しや広報では地元の新聞社「おおたタイムス」の協力を得ており、物品販売は重要な収入源になっている。
- ・運営は、有償を基本としてきており物販収入などを含めて、定常的な助成を受けずに赤字なく行ってきた。しかし映画喫茶の映写機のような設備の高額なものは、その都度何らかの助成を受けて揃えるようにしている。
- ・開設以来、楽しめる企画を色々と実施して来ており、例えばアーティストを招いてのミニコンサ

ートや、現在の場所にこだわらず他の施設を借りての「おやじの学校」男達の料理教室など、有償だが男性が参加しやすいイベントも行ってきた結果、今は男性も抵抗なく参加出来る楽しい場となっている。

- ・各種イベントの企画・アイデアなど発案は、何らかの集う場で参加者からもらい、とにかくおもしろいこと楽しくやろうという何でも実施してみる考え方でやってきた。

■課題と今後の展開

- ・高齢者の中でも団塊の世代を中心に今後激増するので、定年後の居場所と出番にこのようなNPOの活動は重要で、今が広めて大きく伸ばす時期で急務と感じている。
- ・活動の中で最も大切な点は、人と人のコミュニケーションを取ることが必須で、行政ではできにくいところではあるが、相手を和ませる会話の教育が必要と強く感じる。
- ・余之助は、同級生という何でも言い合える強い絆で結ばれた仲間の集まりであり、現在の取り組みをそのまま拡大していくことは考えていない。
- ・同じような居場所をつくるには、その場所や集まる人々が自分達の共通した意識や価値観を持ち、新たに立ち上げて欲しいと期待しており、実際に隣接した伊勢崎市では青年会議所の仲間が開設準備中で、余之助の現状や開設について桑原氏が講師として説明しサポートしている。